社会との関わり

石塚硝子

岩倉市総合体育館のネーミングライツを取得アデリア総合体育文化センターとして地域に貢献

当社は岩倉市総合体育館のネーミングライツ(命名権)を取得し、2023年4月1日から5年間、食器ブランド「アデリア」を施設名に冠した「アデリア総合体育文化センター」として運営されています。

石塚硝子

本社所在地の岩倉市と環境に関する協働

当社は岩倉市が策定した「第2次岩倉市環境基本計画(2023～2032年度)」に積極的に協力し、脱炭素、食品ロス削減、生物多様性保全の3つの重点分野で自治体と協働した取り組みを行っています。

1 脱炭素の推進

2023年7月10日に開催された第2次岩倉市環境基本計画キックオフ・フォーラムに参加し、当社グループのCO_2排出量削減の取り組みについて講演しました。

また、会場では脱炭素に貢献する当社の卵殻ガラス容器を使用したテラリウムを配布し、取り組みをアピールしました。

岩倉市自然生態園の在来種を使ったテラリウム

2 生物多様性保全

「岩倉の水辺を守る会」と協働で、条件付特定外来生物であるアカミミガメ(通称：ミドリガメ)の捕獲調査「アカミミガメバスターズ」に参加しました。この活動は、地域の生態系保護に直接的に貢献するとともに、従業員の環境意識向上にも寄与しています。

捕獲したアカミミガメ

これらの活動を通じて、地域の環境保全に積極的に協力するとともに、従業員の環境意識向上や地域との信頼関係構築にも努めています。

石塚硝子・鳴海製陶

名古屋芸術大学との産学連携プロジェクトの成果発表「石塚硝子とガラス・やきものをめぐる展覧会」

名古屋芸術大学と石塚硝子、鳴海製陶による産学連携プロジェクトの成果展「石塚硝子とガラス・やきものをめぐる展覧会」が2023年9月22日から27日まで開催されました。会場となった名古屋芸術大学西キャンパスでは、工芸コースの学生や大学院生が制作したガラスと陶器の作品が展示され、芸術的創造性と企業の技術力の融合が見られました。この展示会は、若い才能の育成と企業の社会貢献、さらにはグループ会社のアピールにもつながる意義深い取り組みとなりました。

北洋硝子・鳴海製陶

市民に向けた郷土文化の学習機会への協力

各地域の行政団体などが運営する市民向け文化事業に講師として協力しました。

北洋硝子は、2024年2月1日に青森県平川市郷土資料館の事業として開催された「伝統文化鑑賞会」で、青森県伝統工芸品「津軽びいどろ」の歴史や基礎知識を学ぶセミナーの講師を務めました。

鳴海製陶は、名古屋市生涯学習センターの2023年度事業の「なごや学」において、「ボーンチャイナにかける思い～近代陶業史の中のNARUMI～」の講師を務めました。

これらの活動を通じて、伝統技術の継承と地域アイデンティティの強化に貢献し、文化観光の促進にも寄与しています。

特集
鳴海製陶のサステナブルな取り組み

たまごとボーンチャイナの卵デブー

ラン rendez-vous

鳴海製陶(株)は「地球にやさしい企業であり続けるために」「社会の課題解決に取り組み、食文化発展に貢献を」「地域や社員に愛される働きがいのある会社を目指して」の3つの理念に沿って、事業成長を進めるとともに持続可能な社会の実現を目指しています。このたび地球環境に配慮したモノづくりを実現していくために、卵殻由来の新素材開発に着手しました。食卓に並ぶ卵とボーンチャイナには、カルシウムが含まれているという共通点があります。ボーンチャイナの組成は42%のリン酸カルシウムを含み、一方卵殻は90%以上の炭酸カルシウムを含みます。このカルシウムという共通点に着目し、ボーンチャイナで培った粉砕・焼成技術を結集して、廃棄されていた卵殻を活用したアップサイクル素材の開発に成功しました。この新しい挑戦はコア事業であるボーンチャイナの原料をアップサイクル素材へ置き換えるだけでなく、機能性のある卵殻由来のカルシウムパウダーの製造・販売という新事業も創出する、まさに二刀流の原料となりました。

卵殻を活用するメリット

廃棄物の削減につながる　環境保全　持続的に入手可能

地球にやさしい企業であり続けるために

パートナーとともに推進する卵殻活用のサーキュラーエコノミー

2025年は鳴海製陶(株)が日本で初めてボーンチャイナの量産化に成功した1965年から数えて60年目を迎えます。この記念すべき節目の年にボーンチャイナの新たなページを開こうと、数年前から新たな取り組みとして、ボーンチャイナ原料中のカルシウム成分に卵殻を利用する研究に着手しました。

先行して卵殻の利用を開始した石塚硝子との技術交流や、愛知県の環境補助金助成を得たことで短期間のうちにボーンチャイナ原料に15%もの卵殻を配合することに成功しました。

同じ愛知県内の割卵メーカーが廃棄している卵殻を我々の原料として活用することで先方メーカーの産業廃棄物の削減にもつながりました。また卵殻から合成されるアパタイトは生体親和性が非常に高いことが知られており、このアパタイトを合成するメーカーと鳴海製陶の陶磁器製造で使用する大型設備を有効活用することで、卵殻由来粉末の大量供給が可能となり、アパタイトメーカーの量産拡大につながりました。

このように3社それぞれがパートナーシップを組み、産業廃棄物の卵殻から新たな商材が生まれる循環型経済(サーキュラーエコノミー)となりました。

環境に配慮した取り組みはコストがかかるという考えが根強くありましたが、この事例のように他社を巻き込むことで事業として成立させながら、持続可能な社会への貢献ができることがわかりました。

鳴海製陶(株)開発・製造部門 部門長　兼　研究開発部 部長　**西部 徹**

「自社事業での原材料置き換えと他社への原料供給という原料の二刀流に取り組むことが新事業創出のカギになりました」